

ペスタロッチーの「心情陶冶」に関する考察

—「代表者会議査察報告」(1810年)の解釈を中心に—

Die Beobachtung über die Herzbildung in Pestalozzi

: Die Interpretation des Bericht über die Pestalozzische Erziehungs-Anstalt zu Yverdon (1810)

光田 尚美

要約：本稿の目的は、18世紀末から19世紀初頭にかけてのスイスの道徳、宗教についての理解を手がかりに、ペスタロッチーの心情陶冶の特色や基本構造を時代の文脈のなかで解明することにより、そこに内包されている諸原理を今日の問題設定に準拠するかたちで発展的に考察していくための試論を展開することである。

まず、時代の文脈を読み解く資料として、イヴェルドン学園において行われた代表者会議の委任による査察の報告書に注目し、その概要を述べるとともに、心情陶冶に関する記述に絞って報告書の内容を整理する。査察委員は、当時において有識者と見なされた人物から選出されており、その意味において、彼らの見解には時代の精神が反映されていると思われる。

次に、イヴェルドン学園の心情陶冶に対して査察報告書が下した評価の内容を整理し、提出された問題提起を道徳と宗教の観点から考察する。それによって、査察報告書の力点は、いわゆる体系的な宗教の教授による主観性の脱却に置かれ、委員の見解が「理性の宗教」の重視及び宗教の優位性の堅持において特徴づけられることを指摘する。

続けて、ペスタロッチーの構想する心情陶冶の特色を、査察報告書の評価を手がかりに考察する。使用言語の相違から浮かび上がる道徳観、またその根幹をなす道徳と宗教との有機的な連関構造を明らかにする。

以上の考察をふまえて、ペスタロッチーの思想と時代精神との関係を論じる。そして、彼が宗派や限定的な世界観にとらわれずに人間、子どもたちを見つめていたこと、このように柔軟で開かれたまなざしが彼の独自の道徳・宗教理解をもたらしたことを指摘する。こうした指摘において、彼の教育思想の今日的意義が示唆される。

Key Words：ペスタロッチー、代表者会議査察報告書、心情陶冶、道徳、宗教（キリスト教）

1. はじめに

18世紀ヨーロッパの民衆学校 (Volksschule) に対し、ペスタロッチー (Pestalozzi, Johann Heinrich) は、「心情陶冶の方法については極めて欠陥的な状態にある」⁽¹⁾と述べ、厳しく批判している。その声を待つまでもなく、心情陶冶

(Herzbildung, Bildung des Herzen) への強い関心は、初期ペスタロッチーの構想のなかにすでに現れていた。そして、生涯を通じてその重要性を説き、実現可能な方法として一般化することへと尽力したのである。心情陶冶こそが教育の本質であるという確信は、ペスタロッチーの思想と活動の全範囲を貫いていた。

それゆえに、ペスタロッチーの心情陶冶に関しては、多くの研究が提出されている。しかし

2005年12月9日受付/2006年2月1日受理
Naomi MITSUDA
関西福祉大学 社会福祉学部

ながら、その意義を正当に評価することは困難な試みでもある。なぜなら、心情陶冶の基底に存するペスタロッチーの道徳性、宗教性をどのように解釈し、評価するのかという問題が、今日もなお議論の余地を残しているからである。

この議論は概ね、ペスタロッチーの道徳 (Sittlichkeit) 及び宗教 (Religion) 理解と教授学的構想との具体的連関を解明することによって、彼の心情陶冶のなかに、時代に内包される近代的合理化や啓蒙への要請とそれを超越したところに存する局面との統合の論理を見出すという方向性を示している⁽²⁾。なるほど、ペスタロッチーのうちで統合されている二つの局面は、ともに時代の大きな思想的潮流に組み入れられる。そのため、いずれかの系譜に帰属させたいうで、ペスタロッチーの思想の特色を説明することも可能であろう。しかしながら、肝要なのは、彼の思想を特徴づけることではなく、その思想のなかに特定の宗派や時代的背景に規定されえない、いわばそれらを越え出たところに見出されうるものを開明し、さらにそれを今日においても基礎づけ可能な原理として継承するという試みではなからうか。

本稿は、かかる試みの一端として位置づけられる。18世紀末から19世紀初頭にかけてのスイスの道徳、宗教についての理解を手がかりに、ペスタロッチーの心情陶冶の特色や基本構造を時代の文脈のなかで解明し、そこに内包されている諸原理を今日の問題設定に準拠するかたちで発展的に考察していく方途を示したい。

その際、時代の理解に関する資料として、ペスタロッチーのイヴェルドン学園に対して行われた査察の報告書に注目したい⁽³⁾。この査察は、当時のスイスにおける最高機関であった代表者会議 (schweizerische Tagsatzung) の訓令をもとに実施されたものであり、それによって与えら

れた評価は、ペスタロッチー学園の歴史において重要な意味をもっている。また、その具体的な実施にあたり、報告書を作成した委員は、教育学や教授学の基礎知識のほか、道徳と宗教へと精通していることを要件に選考された連邦を代表する有識者であった。したがって、この査察の報告書には、訓令や委員諸氏の個人的見解などを通して、時代の文脈を反映した道徳及び宗教への理解が示されていると考えられる。

そこで本稿は、以下のような手順で考察を進めていく。

まず、代表者会議による査察の概要を述べ、考察を加えることによって、本稿の課題に対して代表者会議査察報告書を取り上げることの意義を示す。次に、査察報告書の心情陶冶に関する項を分析する。イヴェルドン学園における宗教の授業への評価を主として取り上げ、査察結果の概要と考察の論点を整理する。最後に、ペスタロッチーの道徳・宗教性の理解について言及するとともに、論点の相違をめぐって見えてくる彼の心情陶冶の特質について指摘する。

II. 代表者会議による査察の概要

1. 代表者会議の位置

1803年のヘルヴェチア憲法の破棄後、スイスでは再びカントン主権が回復したことにより、各カントン同数の使節からなる旧来の共同機関「盟約者団会議」(eidgenössische Tagsatzung)、いわゆる代表者会議が復活することとなった。

カントン主権が貫かれていたことから、代表者会議の権限は、外交の主導権、軍隊の指揮権、仲裁権などの狭い範囲にとどまっていた。とはいえ、それは旧来の「盟約者団会議」と同様に、連邦の代表使節会議としての役割とともに、連邦の最高機関としての機能を果たしていたのである⁽⁴⁾。

したがって、代表者会議の委任で査察を受けるということは、その施設や活動が国内において重要な意味を持つことの証明となる。また、その査察によって高い評価が下されれば、スイス国内の称賛を得ることに繋がり、活動推進のための特別な措置も見込まれる。そのような意味において、代表者会議への査察の要請は、ペスタロッチーにとって、また彼のイヴェルドン学園の将来にとって重大な意味を持っていたのである。

2. 代表者会議の決議

代表者会議議事録によると、1809年6月2日付で、イヴェルドン学園とそこで実践されている基礎陶冶のメトーデに対して、権威ある代表者会議当局の評価を得たいという趣旨の要望書が、ペスタロッチーによって提出されている。議事録には、ペスタロッチーの要望への対応が正当な手続きを踏んでいなかったことも付記されているが、代表者会議はこの要望書を退けなかった。というのも、議員の多くが、ペスタロッチーがこれまでに全くの献身的行為でもって人間教育に尽力してきたことに対して幾許かの好意を抱いていたことに加え、すでにイヴェルドン学園とその教育システムが公的にも高い関心を集めており、代表者会議の関与に値することに対して疑いの余地がなかったからである⁽⁵⁾。

かくしてペスタロッチーの要望は承認され、1809年6月22日の代表者会議において、以下の決議がなされたのである。

「スイス知事 (der Landammann der Schewitz) は、イヴェルドンの学園及びそこに包括されるメトーデが、それによってもたらされた子どもの精神的能力の発展という点において調査されたのと同様に、子どもの道徳的、宗教的陶冶の点に関してまた、何名かの有識者によってしか

るべきところで調査されることを要請し、その報告書を上層部へと提出すべきである」⁽⁶⁾。

この決議のもとに、1809年11月に査察が実施され、1810年5月12日に報告書が提出された。それは、100部をドイツ語で、50部をフランス語で印刷され、スイスの学校教育の評価・指導に対して影響力を有する要人のもとへと配布されることが決定されたのである⁽⁷⁾。

3. 査察委員の選出

1809年6月22日の決議を受け、委員の選出が行われた。選考基準は次のように報告されている⁽⁸⁾。

- ・教授理論について基礎的な経験を持ち合わせていること
- ・人間規定に対する、また真の啓蒙にとって必要不可欠な条件である宗教と道徳 (Moral) に対する純粋な感性を持ち合わせていること

先の決議にも示されているように、代表者会議の委任を受けて実施される査察は、学園と学園において実践されているメトーデが、子どもの道徳的、宗教的陶冶に対してもたらす意義を明らかにすることを目論んでいる。それゆえに、教授理論への精通はもとより、後者の条件が選考基準に盛り込まれたのである。

この基準に基づいて選出されたのが、バーゼル小評議員であるメリアン (Merian, Abel)、フライブルクのフランシスコ会修道院出身のジラルド (Girard, Pater Gregor)、ベルンの数学教授であるトレクセル (Trechsel, Friedrich) の3名であった。1809年11月18日、彼らはフライブルクでその任命を受けた。

委員の選出をめぐっては、1809年6月20日の代表者会議の招集に合わせて、ペスタロッチー自身から候補者リストも提出されていた。査察上の決定事項については、原則としてペスタ

ロッターの意向に添うことが示されていたが、結果的に選出されたのは、ペスタロッターの推薦する人物ではなかった。クーレマン (Kuhle mann, Gerhard) によると、ペスタロッターのリストに挙げられたのは、ヘルヴェチア共和国時代に指導的地位にあった人物であった。それゆえに、1803年の調停によって樹立された連邦政府にとっては、敵対的な存在であり、任用しえなかったことが指摘されている⁹⁾。

このような意味において、代表者会議による査察はその前段階からすでに、ペスタロッターの要望に合うものとはいえなかったかもしれない。しかし、それによって、ペスタロッターの名声に引きずられる形で無条件に支持されることの危険性が回避され、査察の中立性が保障されたともいえる。

その一方で、リートケ (Liedtcke, Max) のように、この査察を「きわめて欠陥のあるものであり、偏向したものであった」¹⁰⁾とする指摘もある。リストに挙げられていた推薦者はペスタロッターの支持者でもあった。彼らが敵対的な存在として退けられたということは、政治的対立という要素が、ペスタロッターの思想や活動に対する判断にも働き、正当な評価を下しえなかったのではないかと考えられる。

とはいえ、査察の正当性や信頼性の吟味についてはいくらかの課題が残るものの、少なくとも代表者会議査察報告書によって、当時のスイスの有識者らが構想する学校教育に対する基本的な構えもうかがい知ることができる。

4. 代表者会議の訓令

査察に先駆けて、スイス知事より訓令 (Instruktion) が出されている¹¹⁾。それによると、まず、査察報告書を公益的なものとする事とともに、その実現化を図るという期待のもとに、査察や報告書作成における厳密性が要求さ

れている。とくに、公益に資すると思われる事項については正しく理解し、その価値を判断すること、また、些末なことや広範なことがらは避け、包括的にメトーデの精神を評価することに努めることなどが指示されている。

次に、代表者会議の意向が示されている¹²⁾。査察の具体的な実行の計画は、原則として、委員諸氏にその決定権が委ねられた。しかし、以下の事項については、委員の判断で無視できないものとして提示されている。

①学園全体の描写

これは、学園の教育内容や訓練の概要を知るために、児童が入学し、初等教育を受けて学園を去るまで、どのような授業を受け、どれだけの期間を要したのかを具体的に明らかにするものである。

②メトーデの描写

これは、ペスタロッターのメトーデが他の教授方法とどのような点において相違しているのかを明らかにするものである。メトーデの進歩的な展開に倣い、他の施設での適用について評価することが目論まれている。

③学園の価値の判断

先の①、②での描写をもとに、学園の教育活動全体に対して価値づけを行うものである。メトーデの与える最初の影響が、子どもの自然の素質や情緒的特性に対してどの程度適当なものであるのか、また、それがいかに早急に、易しく、しかも確実な道を歩み、子どもを人間性の高みへと導くのかななどを批評し、判断を下すのである。

④学園の有用性

これは、スイスの他の教育施設への適用の可否を検討するものである。そのため、以下の事項を調査することが要請され

る。

- (i) ペスタロッチーのメトーデは、整備された国民学校 (Landschule) あるいは都市の小学校 (Primarschule) の課題を十分に解消するものであるか。また、すべての階層に対する国民教育の基礎として評価しうるものであるか。
- (ii) ペスタロッチーのメトーデ、及び高等教育の対象となる各種学問領域へのその適用は、構想されている中等教育の理念に適合しうるか。
- (iii) ペスタロッチーのメトーデは、リセやアカデミーへの有益な準備として見なされうるか。

以上のように、公益性が重視されているのは、当時のスイスが教育及び学校改革を推し進めていたことによる。高等教育機関の拡大、さらにそれに伴う初等・中等学校の整備が、各カントンの当面の課題であったのである。それゆえに、ここに示された事項については、訓令として効力を持たせることによって、その報告を義務づけたのである。

5. 査察報告書の構成

報告書の構成は、以下の通りである。

第I部 イヴェルドン学園の描写

第1章 児童学校

- (1) 身体的教育
- (2) 精神陶冶
- (3) 技術陶冶
- (4) 道徳的・宗教的陶冶
- (5) 一般的設備

第2章 教師養成施設

：教師のための施設／女性教師のための学校

第3章 管理

第II部 イヴェルドン学園についての所見

第1章 施設の精神

- ・学園の教育システムは、どのような原則に拠っているのか。
- ・このような原則は、施設にとって他のどこにもないほどに固有のものか。
- ・ペスタロッチーは、学園で作り上げられたこれらの原則の発案者であるか。
- ：家庭的・母性的教育についての洞察／技術としての教育についての洞察／学園と基礎教科書

第2章 施設の詳細な査察

(1) 児童学校の査察

：身体の教育／精神陶冶／技術陶冶／心の陶冶／研究計画

(2) 教師養成所の調査

第3章 公教育に対する学園の有用性

：初等学校への有用性／中等学校への有用性／教養学校への有用性

III. 代表者会議査察報告書における心情陶冶に関する考察

代表者会議査察報告書において、心情陶冶は「決定的な観点、あらゆる教育の試金石」⁴⁰と表現され、「あらゆる教育における最も上位」⁴¹に位置づけられている。査察の力点が心情陶冶に置かれていたことの真実は、まさにこれらの文言に証明されている。

その概略的な記述については、報告書の第1部第4章「道徳的、宗教的陶冶」にまとめられている。それに加えて、委員諸氏の考察が、第II部「イヴェルドン学園についての所見」の「心の陶冶」(Bildung des Herzen)の項目で展開されている。

心情陶冶についての査察の観点は、概して、次の4点にわたっている。

①学園全体の雰囲気

②宗教の授業 (Relisios-Unterricht)

③宗教の訓練 (Relisiose-Uebungen)

④道徳的規律 (Moralische Disciplin)

そのなかでも、大幅に紙面を割いて報告されているのは宗教の授業である。そして「道徳的、宗教的陶冶」の章では、何よりもまず、宗教の授業一般に対する委員による次のような見解が述べられている。

「宗教の授業は、人間を最も高みにあるその根源へと導くことによって、彼を永遠へと高めることによって、そして彼に創造への鍵を指し示すことによって、その精神を豊かにし、知力を陶冶する。それは人間を、彼の陶冶の極みへと連れて行くのである」⁶⁴。

このことから、「心情陶冶」についての査察の力点が、宗教の授業に置かれていたことをうかがい知ることができる。

そこで以下、イヴェルドン学園の宗教の授業についての報告を中心に、その概要を述べるとともに、考察の論点を整理したい。

1. イヴェルドン学園における宗教の授業

報告書によると、イヴェルドン学園における宗教の授業は、互いに関連性を有し、連続して展開する3つのコースと、コースの締め括りとして位置づけられているが、個別に独立して行われる教授(第4コース)による4段階で構成されていたようである⁶⁵。

①第1コース

最年少の児童に指定のものである。ここでは、特定の宗派への信仰や教義を問われることはない。また、通常の拘束的な授業という形態もとられない。

テキスト「宗教的な母の書」(das religiöse Buch der Mütter)を通じて、子どもの注意を彼の身体、魂、生活全体や境遇に向けさせるとともに、彼らにとって身近なものな

に、高次なもの、神的なものを指し示す。このような呈示を通して、もっぱら神と自己自身の関係について感覚的に把握することに慣れさせる。

②第2コース

聖書が手渡される。教師によって説明される各箇所が、児童によって暗唱され、また書き写される。

これまでに獲得された真理が、聖書を通して確認され、さらに新しい真理と結び合わされる。

③第3コース

旧約聖書にかかわる歴史が教授され、以下の3つの問いが提起される。

- ・人間はいかにして神の知識へと到るのか
- ・このような知識はどこに存在するのか
- ・このような知識がいかにして人間のなかに現れるのか

旧約聖書の歴史の具体的記述なかに、これらの問いに対する答えが示される。

④第4コース

キリスト教が教授される。福音書がテキストとして用いられる。イエスの生涯、教えを通して、人間における神性の展開が指し示される。

このコースは、キリスト教が対象となっており、いわば聖体拝領への準備段階でもある。半年間を通して受ける必要がある。それゆえに、通常のクラス授業では行われず、希望者のみを対象とした特別枠(毎日1時間)の個別授業という形態がとられる。

2. 宗教の授業についての考察

(1) 包括的な評価

宗教の授業の査察を通して、委員は次のような所感を記している。

「児童の心情に敬虔さを植え付けようとする率

直な努力が認められる」。

「他の教育施設ではほとんど目にするもののないあの我らの父の宗教的精神が、まったく純粋にかつ明瞭に表されている」⁹⁹。

概ね、好意的な評価である。さらに4段階の授業編成については、当時の体系化された宗教の授業との比較において、次のような解釈がなされている。

委員によると、宗教の授業の体系は二階建ての家屋に譬えられている。旧約聖書が一階に位置し、二階から福音書が見下ろすという構造である。したがって、旧約聖書から福音書への展開はイヴェルドン学園にオリジナルなものではない。事実、報告書では、「この点において学園は、他の場所で行われていることを模倣している」¹⁰⁰と評価されている。

しかしながら、このような体系に基づく授業が子ども期 (Kindheit) には適していないこともまた確認されている¹⁰¹。というのも、子ども期には、神や宗教を自らの力で獲得することができないからである。そこで、子どもの想像力や心情、好奇心に相応した方法の必要性が確認される。

報告書によれば、この点に関して、第1及び第2コースが注目されている。ここでの目論みは、「具体的な行為における道徳」(eine Moral in lebendiger Handlung) を扱うことによって、子どもの身近な世界のなかに「高次のもの、神的なもの」を指し示すというものである。ここでは、観察される諸対象についての道徳的、宗教的な説明や注釈は行われない。子どもの道徳的情調 (sittliche Gefühlsstimmung) を鼓舞し、自己自身についての直観、ペスタロッチーの表現するところによると「内的直観」(innere Anschauung) を刺激することが重要視されている。「児童は、キリスト教信者にならないうちに、若き哲学者

になる」¹⁰²ことが求められるのである。

子どもの特性に照らすならば、かかる試みは、後に続く講義の段階への合目的な導入であるといえる。委員はこの点を評価している。しかしながら、それは支持的なものではなく、いわば一つの革新的な試みとしての評価に留まっている。

宗教の授業編制やその意図の妥当性をめぐっては、いくつかの問題もまた提起されることとなる。次のような但し書きののち、委員の問題提起が展開される。

「私たちは現に行われている宗教の授業に対する幾つかの不同意を述べようとしているが、その際、読者は単なる形式や事象にのみ目を向けないようにしてほしい」¹⁰³。

すなわち、委員の認識において、この問題提起は、「形式や事象」に帰せられるものではなく、イヴェルドン学園の宗教の授業、ひいてはペスタロッチーの心情陶冶の本質に関わるものなのである。それはすなわち、宗教の授業における道徳と宗教の連関をどのように描き出すかという点に集約される。

(2) 問題提起の観点：Moral und Religion

委員の問題提起は、道徳と宗教という二つの観点にもとづいて行われている。そこで展開される考察は、当時を代表する有識者の持論であり、その限りにおいて、時代の思想を読み解く手がかりともなりうる。以下、委員の考察を中心に、道徳と宗教についての理解を分析していきたい。

まず、この二つの観点をめぐり、次のような所感が記されている。

「学園は、道徳と宗教とのあいだにちがいを認めていない。宗教は道徳的であり、道徳は宗教的である」¹⁰⁴。

学園の心情陶冶の基本的な構えとして、道徳

と宗教の不分離が強調されている。さらに続けて、次のような考察が述べられている。

「(学園の) 授業は、道徳から宗教へと上昇していくというよりも、宗教から道徳へと上昇していくかのようである」⁸³。

「宗教から道徳への上昇」とは、宗教の授業の段階的な構成を指しているのではないことに留意しなければならない。つまり、この考察は、学園における心情陶冶が道徳の優位性のもとで行われていることを指摘するものである。したがって、道徳が高次に置かれているという意味において、「上昇する」(steigen) と表現されているのである。

道徳と宗教の不分離及び道徳の優位性という理解を前提として、報告書では、両者の分離という視点が加えられ、委員の持論が幾つかの箇所にもたがって展開されている。

「なるほど我々は、道徳と宗教とが内的に結び合っており、両者の意味を持ち合わせていることを十分に理解している」。しかしながら、「一般に人間は、両者を最終的に分離するようになる」⁸⁴。「抽象化作用が両者を分けるのである」⁸⁵。

分離への志向の根拠は、人間の一般的傾向として処理されているかのようであるが、次のような考察から、道徳と宗教とを規定する本質的な要素への言及をうかがい知ることができる。

「抜粋(福音書の抜粋)を合目的的と見なすということを考えるべきではないならば、あらゆる実証的な証明が締め出されている第1コースの場合は、まったくもって合目的的とは考えられない」⁸⁶。

これは第1コースに対する批判を例にとっているが、「あらゆる実証的な証明が締め出されている・・・合目的的とは考えられない」という見解から、体系化された「理性の宗教」

(Religion der Vernunft) を重んじる立場が見えてくる。つまり、ここで示される道徳と宗教の分離とは、主観性からの脱却を意味しているといえる。

そこで注目されるのが「抽象化作用」(Abstraktion) である。具体的には、「言語」(Sprach) による説明や注釈であるが、それは、「自然の声のなかに次第に消えてなくなる啓示の数々」⁸⁷ に対して客観的な根拠を与えるとともに、これらの啓示を強化する作用を持つものと考えられている。このような理解に拠って立ち、報告書では、「抽象化作用」を「導きの星」(Leitstern) として機能させることが、宗教の授業の根本原理として確認されている。

それに対して、イヴェルドン学園の宗教の教授は、あまりにも「言葉あるいは見かけ上の精巧さ」(Worten oder leere Subtilitäten) を退けているがゆえに、かかる原理を見出しえていないことが批判されている⁸⁸。そこで一つの提案として、準備された解明を何ら要しない第1コースであっても、子どもに受け取られた直観に対して「単純で、感動的な注釈」(einfache und ergreifende Bemerkungen) をつけることなどが勧められている⁸⁹。しかしながら、最終的には、心情陶冶のための授業の根本的改革が要請されることとなる。それを決定づけているのが、道徳の優位性に対する批判である。

「宗教的でもキリスト教的でもない道徳は、まったく無価値」であり、「宗教から引き離されると、道徳は弱いものであるし、また弱くなる」⁹⁰。

かかる考察からも明らかであるように、委員諸氏は、宗教の優位性を堅持すべきであるという見解に拠っている。とくに、道徳の実証的な根拠として、キリスト教を教授することが強調されている。それによると、「実生活がそれに

基づいて正義を要請するところのものは、乏しい知には委ねられない」⁹⁰。そこで、「信仰と理性とが相互に補完し合い、結び合い、鼓舞し合いうる」⁹¹ためにも、すべての原理原則の総体あるいは本質をあらわすものとされる神学 (Teologie) によって、「知」(Wissen) が補われるように要請しているのである。

以上のことから、委員諸氏の見解は、2点に集約されよう。一つは、宗教による主観性の脱却のための「理性の宗教」の重視、もう一つは、心情陶冶における宗教の優位性の堅持である。それらの点から鑑みれば、イヴェルドン学園における宗教の授業は、必ずしも期待に沿うものとはいえなかったのである。

なるほどそれは、個人的な見解の相違に過ぎないかもしれない。しかしながら、委員諸氏の見解に照らして支持あるいは批判されたもの、さらにその評価のまなざしから抜け落ちたもののなかに、個人的な見解を超えたものもまた指摘されうるのではなからうか。そこで以下、報告書によって明らかにされた宗教の授業の特色に依拠しつつ、そこから導き出されるペスタロッチーの理解について言及していきたい。

IV. ペスタロッチーにおける道徳・宗教の理解

1. Moral und Sittlichkeit

すでに指摘したように、報告書によれば、イヴェルドン学園における宗教の授業は、道徳の優位性を基本原理とした道徳と宗教との不分離、さらに言えば、両者の有機的連関に特徴づけられていた。この点については、とくに問題が提起され、掘り下げた考察が試みられていた。

その試みにおいて目を引くのは、道徳への言及において、Moral という単語の使用されていることである。なぜなら、ペスタロッチーが道

徳について語る場合、その大半は Sittlichkeit を使用しているからである。

この用語使用の相違から、両者の道徳観における根本的相違が浮かび上がる。たとえば、委員は、イヴェルドン学園における宗教の授業の出発点に関して、次のような問いを提出し、学園に回答を求めている。

「道徳がキリスト教に先行したり、あるいはそれとともに進行したりする限りにおいて、その道徳は純粹に倫理的、あるいは幸福主義か、あるいは同時に両方であるのか。学園はその全作用において、どのような道徳原理に与しているのか」⁹²。(Ist die Moral, in sofern sie dem Christenthum vorangeht oder dasselbe beyleitet, — rein sittlich od. Eudämonismus, od. beydes zugleich? — Zu welchem Moralprincip bekennt sich das Institut in seiner ganzen Wirksamkeit?: 下線は著者)

学園から寄せられた回答は、以下の通りである。

「個々の道徳原理は、限定的であり、そのようなものから出発することは教育的ではない。我々は自然以外のものを認めない。我々は、人間の素質や力の全範囲にわたって、自分自身によって自然(本質)を発展させる。そしてその全範囲において、キリスト教の精神を描き出させ、表現させるのである」⁹³。

この回答は、学園の教育活動が自然の方法に与していることを改めて確認させるとともに、上位の原則を教示するような純粹道徳を限定的な「道徳原理」(Moralprincip) として退けている。そしてそのうえで、道徳の本質が、「自然(本質)を発展させ」うる自己自身の力に求められることを主張している。

それでは、道徳の本質を規定する自己自身の力とは、何を意味するのであろうか。その点に

関して、S. シュプランガー (Spranger, Sylvia) が示唆的な解釈を提供している⁹⁸。それによると、ペスタロッチャーは、マタイの福音書の抜粋を授業のテキストとして用いることがある。そしてそこには、娼婦 (die Huren) や守銭奴 (geldgierige Zöllner) がしばしば登場するが、彼らは、「イエスのまなざしや語りかけによって自己自身に対する拒絶を明確に意識し、自己自身との対決を通して革新的に変化する」⁹⁹。その再現は、「自己自身の弱さや無力を意識することによって呼び起こされる情調」が、他者への好意や同情を目覚めさせうる適切な「心理的手段」(psychologisches Mittel) であることを示している。

S. シュプランガーの解釈に依拠するならば、ペスタロッチャーの道徳、すなわち Sittlichkeit の本質は、「自己自身の弱さを意識すること」(das Bewusstwerden der eigenen Schwäche) とともに、それを克服する意志の力を指し示している。しかしその力は、自己の内面においておのずから汲み出されてくるものではない。それは必然的に、「神の子であることを意識すること」(das Bewusstwerden der Gotteskindschaft) と結び合う¹⁰⁰。それは、「彼(人間)の心のなかに生き生きと存在する神的な力」¹⁰¹とも言い換えられている。つまり、内的な神性を感受することが、道徳の本質を規定するもう一つの要素なのであ

る。

2. Sittlichkeit und Religion

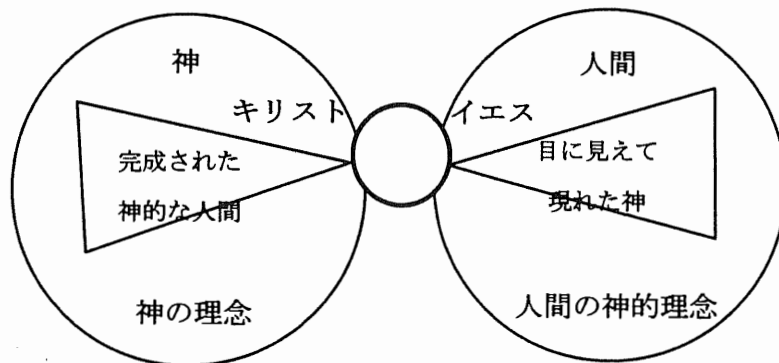
意志の力が、このような内的な神性を必要とするのは、その神的な力が、自己自身の完成の可能性を予感させるからである¹⁰²。ペスタロッチャーにおいて、この予感を媒介するものがキリスト教であり、イエスの像なのである。

報告書によると、イヴェルドン学園におけるキリスト教の「教授」(Unterricht ≅ Vorklesung) は、第4コースで初めて本格化されることとなる。このコースでは、イエスの生涯を対象として、「人間におけるすべての純粹さ、高貴さ、神性さが、イエス・キリストの人格のなかでどのように展開し、示されているのか」¹⁰³を教示することが目論まれている。

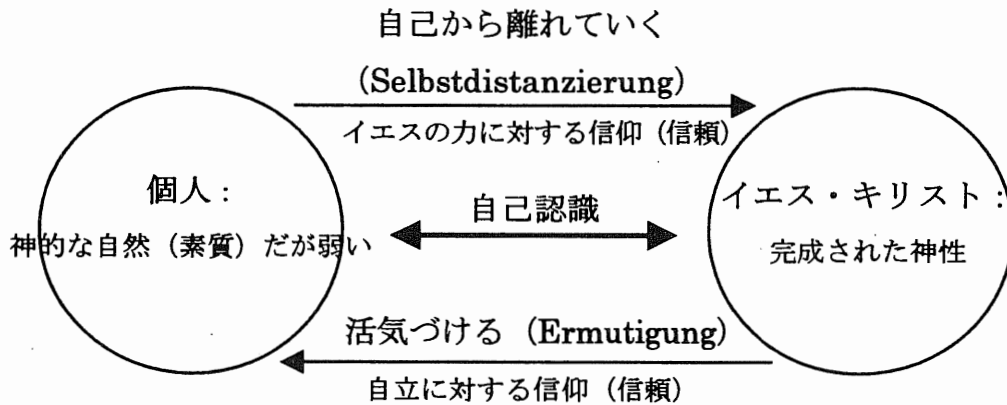
しかしながら、かかる試みもまた、委員が期待する体系的な授業とは一線を画するものと評価されている。それはむしろ、「人間に対する宗教の作用の仕方を解説する」¹⁰⁴ものといえるかもしれない。

S. シュプランガーは、ペスタロッチャーの論考『基礎陶冶の理念について』(Über die Idee der Elementarbildung, 1811) をもとに、ペスタロッチャーの心情陶冶におけるキリスト教理解の構造を次のように図解している (Figur. 1)。

神と人間、神性の理念と人間の神的理念の接点にイエスが位置づけられている。そしてイエ



Figur.1: イエス・キリストの意義



Figur.2:信仰 (Glauben) の現象

スは、両局面の「触媒」(Bindeglied)として、「純粋な表象において達成不可能に見えるものを体現し」⁴⁹つつ、神性への接近を人間に許しているのである。

さらに、S. シュプランガーは、ペスタロッターの思考に基づく「信仰」(Glauben)の現象を図示している。それは、先の図の接点においてあらわれる宗教的作用の内実を取り出したものともいえる (Figur. 2)。

つまり、ペスタロッターのキリスト教理解の構造には、道徳と宗教の有機的な連関に基づいて展開される、人間の内面における醇化 (Veredelung) の力動的プロセスが内包されている。それは、自己の「弱さ」への意識と、「神の子であること」の意識によって内的に鼓舞され、自己を打ち破る力を獲得していくという人間の「道徳的自立」(sittliche Selbständigkeit)の歩みであり、ペスタロッターの理解において、道徳の本質を描き出しているのである。

以上のことから明らかなように、ペスタロッターは道徳を、いわば自己の内なる声に従って生きることと見なしている。したがって、義務の体系や概念を外から与えるような道徳的教示をまずは退け、徹底的に自己の内へと問いかけることから始めるのである。自己の内なる声、

それは良心とも言い換えられるが、それを目覚めさせることが何よりも優先されるのである。

宗教は、その目覚めにおいて働く。それは、道徳の根拠を実証する知としてではなく、神的な人間の像と彼が生きた道筋を呈示し、そのドラマを通して、人間に「弱さ」を自覚させる。それと同時に、彼の心の奥底に「神の子である」という意識をも目覚めさせるのである。

その限りにおいて、ペスタロッターの宗教の本質は道徳的であるといえる。そして道徳は本質的に、宗教に依存している。代表者会議査察報告書は、まさにこの点を指摘したのである。しかしそれは、彼らの期待に沿うものではなかった。そこには、両者の道徳観、宗教観の相違のみならず、人間教育に注がれるまなざしにおいてまた、決定的な相違が見て取れよう。

V. おわりに—論点の相違をめぐって—

代表者会議査察報告書に記録されているイヴェルドン学園の宗教の授業は、あまりにも個人的、主観的な導入段階の曖昧さ、体系的な宗教の教授の不備などの観点から、結果としてその価値を低く見積もられている。今日においても、その評価の妥当性が論議されているが、それを再考するためには、「宗派を超えて」

(Jenseits der Konfessionen)の論議が考慮されなければならぬ⁴³。

ペスタロッチーがその思想と活動において、敬虔主義的性格をもつキリスト教信仰の影響を受けていたこと、より積極的に言えば、その信仰に徹底的に従っていたことは、すでによく知られている。そして、とりわけその思想の形成期に関わったと見られるチューリヒの敬虔主義は、硬直化した「正統信仰」(Orthodoxie)へのプロテストに示されるように、スイスの伝統を革新するさまざまな改革的要素を孕んでいた⁴⁴。

また、ペスタロッチーの生きた時代のスイスは、その歴史に類を見ないほどの大きな転回を経験していた。その一つに、ヘルヴェチア運動(Die helvetische Bewegung)がある。共和制を超えた連合(ヘルヴェチア協会)が代表邦によって形成され、各カントンの改革努力を牽引していったのである。

ヘルヴェチア運動による根本的変革は、公的、社会的、農業的、商業的、文化的活動の全般に及んだ。その一つに、ヘルヴェチア的寛容(Die helvetische Toleranz)による宗派的対立の調停があげられる。カトリック、改革派の聖職者がともに協会員に加えられ、ヒューマニズムを機軸とした啓蒙運動が展開されていくこととなる⁴⁵。

ペスタロッチーの交際関係を鑑みれば、こうした改革ないし革新の流れが、彼の教育思想のうちにも自然と取り込まれていったことは容易に想像できる⁴⁶。しかし、彼の教育的革新は、新たな世界観によってもたらされた原理を応用していくものではなく、子どもたちとの生活を通して得られた実証に基づいたものである。

「私の目の前に入る子どもたちの卓越した陶冶能力は、私にとって目を引くものであり、とりわけ特徴的なものであった。彼らの精神性の

源、彼らの内的鼓舞の基礎、それらは非常にしばしば、あらゆる点において感動的であった」⁴⁷。

おそらく改革的な精神の柔軟さや寛容さが、ペスタロッチーをこのような経験へと開かせたのであろう。何ものにもとらわれない思考の自由さは、宗教に対しても発揮される。

「私はキリスト教を、肉体に対する精神の高揚の教えを最も純粋に、最も気高く修正するもの以外の何ものでもないと見なしている。私はこの教えを、大きな秘密であるから見なしている。また、私たちの最も内なる自然をその醇化になじませる、あるいは私自身をより明確に表現する、または愛の最も純粋な感情の内的発展によって、感覚に対する理性の支配へと達することを可能とする唯一の手段と見なしている。私が思うに、それがキリスト教の本質である」⁴⁸。

ペスタロッチーはかかる確信のもとに、このキリスト教の本質を心情陶冶において展開しようとしたのである。「愛の最も純粋な感情の内的発展」という文言に示されているように、そのためには、何よりも子どもが自らの潜在的な道徳的情調を目覚めさせ、それを表現し、発揮し、高めようとして内的に鼓舞されなければならない。それを実現するのが、心情陶冶としての宗教の授業の本懐なのである。

ペスタロッチーの実践は、一つの革新的な試みとして評価されたが、何ら奇をてらったものでも、時代に迎合したものでもない。それは、子どもたちの潜在的力の発見に基づき、「人間が人間として生きる」という教育の本質的原理の解明へと愚直に突き進んだ成果であるといえる。

ヘルヴェチア協会は、こうしたペスタロッチーの試みを高く評価した。しかし、やがてへ

ルヴェチア体制は崩壊する。改革の刺激は緩み、一部では、旧スイス同盟に備わっていたあの硬直状態 (Erstarrung) が見られるようになった⁵⁹。イヴェルドン学園における心情陶冶の実践は、スイスの伝統の復権とともに、およそ「理性的正統信仰」(vernünftige Orthodoxie)に通じたカトリック的視点から評価されたようである⁶⁰。しかし、先の言及に見られたように、ペスタロッチーは理性と矛盾した宗教を拒絶している。この点において、必ずしも査察の評価は妥当とは言えないのである。

しかし査察は、次のように締めくくる。

「異なる信条の者たちが、この平和な家のなかで、対立することなくいかに打ち溶け合って、ともに生活していることか。信仰を持つものは、信仰を持つものを敬い、尊重するのである」⁶⁰。

ここに、ペスタロッチーの心情陶冶が「宗派を超えて」実現されていることが示されている。それは、時代の精神に単純には与しえない普遍的原理として、今日の「心の教育」の問題を基礎づけることができるのではないだろうか。その詳細な解明は、今後の課題である。

VI. 引用・参考文献

- (1) Pestalozzi, J.H. : Geist und Herz in der Methode. 1805 In : Buchenau, A. u.a. (Hrsg.) : Sämtliche Werke, Bd.18, Berlin 1943, S.31.
- (2) ペスタロッチーの心情陶冶を特徴づける宗教的基盤については、主として、次のような先行研究があげられる。ドイツ理想主義の立場から、ペスタロッチーの宗教性を「啓蒙主義的キリスト教」として見出し、彼を「新プロテスタント」と位置づけるもの (Hoffmann, H. 1944), 神秘主義との関係においてペスタロッチーの宗教性をとらえたもの (Delekat, F. 1926), 敬虔主義との影響関係を解明したもの (Froese, L. 1963) などである。

わが国においても近年、かかる課題に迫る研

究が提出されている。チューリヒ・プロテスタンティズムの影響とともにスイスの伝統との親和性を内包したペスタロッチーの宗教性の特徴を明らかにし、特定の宗派にとらわれることのない超越的な宗教的態度に、近代的要素を見出したもの (森川, 1993), ペスタロッチーの著作をその根底に流れる宗教思想に焦点を定めつつ、その成立と展開を明らかにしたもの (福田, 2002) などがあげられる。

- (3) 原題は, Bericht über die Pestalozzische Erziehungs-Anstalt zu Yverdon, an Seine Excellenz den Herrn Landamann und die Hohe Tagsatzung der Schweizerischen Eidgenossenschaft, 1810 (ペスタロッチー主義のイヴェルドンの教育施設に関する報告, スイス知事閣下及びスイス連邦上級代表者会議に宛てて) であるが, 本稿では「代表者会議査察報告書」と称する。
- (4) 代表者会議の前進ともいえる「盟約社団会議」や代表者会議の位置については, U. イム・ホーフ, 森田安一監訳『スイスの歴史』刀水書房, 1997年を参照されたい。
- (5) Vgl. Bericht über die Pestalozzische Erziehungs-Anstalt zu Yverdon, 1810, S.1-2.
- (6) ditto, S. 3.
- (7) Vgl. ditto, S.11.
- (8) Vgl. ditto, S. 4.
- (9) Vgl. Kuhlemann, G. : Pestalozzis Erziehungsinstitut in Burgdorf und Yverdon. Ein Literatur- und Forschungsbericht zum Thema unter besonderer Berücksichtigung der Zerfallserscheinungen des Instituts, Bern 1972, S.51.
- (10) M. リートケ, 長尾十三二・福田弘訳『ペスタロッチ』理想社, 1985年, 201頁。
- (11) Vgl. Bericht, S.6-7.
- (12) Vgl. ditto, S.7-10.
- (13) ditto, S.55.
- (14) ditto, S.172.
- (15) ditto, S.55.
- (16) Vgl. ditto, S.56-62.
- (17) ditto, S.174.
- (18) ditto, S.177.
- (19) Vgl. ditto, S.177
- (20) ditto, S.175.
- (21) ditto, S.175.

- ② ditto, S.55.
- ③ ditto, S.55.
- ④ ditto, S.55.
- ⑤ ditto, S.176.
- ⑥ ditto, S.176. 宗教の授業では、しばしば教師が作成した福音書の抜粋がテキストとして使用されていたのである。
- ⑦ ditto, S.176-177.
- ⑧ Vgl. ditto, S.181.
- ⑨ Vgl. ditto, S.178.
- ⑩ ditto, S.180.
- ⑪ ditto, S.179.
- ⑫ ditto, S.178.
- ⑬ ditto, S.57. 査察は数日をかけて行われたが、きわめて短期間であり、イヴェルドン学園の試みの継続した展開は観察されていない。したがって、一回の授業では解明されえない事項に関しては、学園側に説明を求めている。その回答は、注のかたちで報告書に付記されている。
- ⑭ ditto, S.57-58.
- ⑮ Vgl. Spranger, S. : Die Bedeutung von Jesus Christus für Pestalozzis Konzept der sittlichen (Selbst-) Erziehung. In : Hager, F-P. u.a. (Hrsg.) : Pestalozzi — wirkungsgeschichtliche Aspekte, dokumentationsband zum Pestalozzi-Symposium 1996, Bern/Stuttgart/Wien 1996, S.350. 本論において著者を S. シュプランガーと表記したのは、あまりにも著名な E. シュプランガー (Spranger, Eduard) との区別を考慮してのことである。
- ⑯ ditto, S.350.
- ⑰ Vgl. ditto, S.350.
- ⑱ ditto, S.347.
- ⑲ Vgl. ditto, S.349. S. シュプランガーは、ペスタロッターのキリスト教理解におけるイエスの位置を、イエスの直観の意義でもって説明する。それはすなわち、「イエスに内在する神的力量を基礎として、彼のなかに唯一の完成の可能性を直観すること」である。
- ⑳ Bericht, S.60.
- ㉑ Spranger, S. a.a.O. S.354.
- ㉒ ditto, S.354.
- ㉓ Vgl. Stadler, P. : Jenseits der Konfessionen. Zur Christlichkeit des älteren Pestalozzi. In : Nachdenken über die Schweiz, Geschehene und geschehene Geschichte, Schaffhausen 2001.
- ㉔ Vgl. Dellsperger, R. : Pestalozzi und der Pietismus. In : Hager, F-P. u.a. (Hrsg.), a.a.O. S.330.
- ㉕ Vgl. Im Hof, U. : Aufklärung in der Schweiz, Bern 1970, S.56-57.
- ㉖ ペスタロッターの伝記的研究を参照されたい。そのほか Vgl. Dellsperger, R., a.a.O. ここでは、彼の改革的思想に影響を与えた人物として、フレーゼの研究にもとづき、ボードマー (Bodmer, J.H.) やメスマー (Mesmer, J.) のほか、妻アンナの家系に革新的な敬虔主義者がいたことなどが注目されている。
- ㉗ Pestalozzi, a.a.O. Bd.27. S.177.
- ㉘ Pestalozzi, J.H. : Sämtliche Briefe, bearbeitet von Dejung, E., 1946-71, Bd.3. Zürich S.298.
- ㉙ Vgl. Stadler, a.a.O. S.207.
- ㉚ Vgl. Im Hof, a.a.O. S.57. ここでイム・ホーフは、スイスにおけるカトリックの啓蒙の特徴について述べているが、その一つの観点として、真の内的改革を目指すという意味において、改革派の「理性的正統信仰」への親和を見出している。
- ㉛ Bericht, S.62.